

## 10 『耳囊』に記録された民間療法

浜田 善利

『耳囊』はまた『耳袋』とも書かれて、江戸時代に、旗本で、江戸の南町奉行を勤めた根岸鎮衛(やすもり)が著した随筆である。鎮衛(一七三七—一八一五)は天明年間から文化年間にかけての三〇余年間に本書を書き継いでいる。本書に収められた話は、奇談や雑話の類であって、いずれも飾らない文章で綴られ、著者の率直な人柄があらわれている。鎮衛自身の裁判の時の体験談や、奉行として市中の風説を探るものやとするものが僅かにあるが、大部分は人から直接聞いた話、誰かの話の又聞きの話といった形の、聞き書きとして記録されている。

『耳囊』の記事の中には、医者の治療や民間療法に関係のある話も混入している。記録されている人名の中に、医

師の与住玄卓、秋山玄瑞、木村元長、斎藤友益、城芸(宗)英、阿部春沢、西良忠、その他に小児科医も鍼医も含まれているので、当時の医師の治療がうかがえる話もあり、鎮衛の耳に入った市井の民間療法の話もある。また健康にかわりのある呪いの類もいろいろと書き残されている。そこで呪いの類も含めて、およそ医療、医薬に関係のある話を抽出し、その内容を、江戸時代の各種の民間療法の記録と比較しながら検討した。

関係があると思われる話は、重複しているものがあるが、全部で約九九話あり、その中で医療と民間療法を合わせたものが六八話、呪いを用いるものが三一話あった。

例として『巻四』に含まれているものを、見だしを幾つかあげると、次のようである。

治療方に関するもの

- ◎耳へむしの入りし事、◎小兒餅を咽へ詰めし妙法の事、
- ◎眼の妙法の事、◎歯の妙薬の事、◎金瘡・灼傷の即薬の事、◎俄の乱心一葉即効之事

呪法

- ◎鼻血をとむる妙法の事、◎しやくり呪の事、◎咽へ骨を

立手し時呪の事、◎痔の神と人の信仰可笑事、◎疝気まじないの事、◎痔疾まじないの事、◎雷を嫌ふもの薬の事  
このほかに、処方にまつわる話もある。

◎実母散起立の事(巻二)、◎十千散起立の事(巻六)

『耳囊』の刊行本は、岩波文庫の旧版の二冊本(一九三九年初版)は六巻本であったが、現在の同文庫の『耳囊』は上中下の三冊本(一九九一年刊)で、これには新しく一〇巻本が収められている。また東洋文庫にも『耳袋』二冊本(一九七二年初版)があり、これも一〇巻本であるが、この刊本はページ数の関係から、呪いや民間療法的な記事は削除されている。そこで本研究では岩波文庫の三冊本を用いることにした。この底本になったものは、カリフォルニア大学バークレー校東アジア図書館所蔵の旧三井文庫で、現在知られる諸本中唯一の一〇巻完備の本である。

(熊本工業大学)

## 11 群馬県沼田市の石仏と民間信仰について

○<sup>1)</sup>湯浅高之・<sup>2)</sup>藤野珥男・<sup>3)</sup>屋代正幸

医学の発展をみない昔の人々は、病気の苦しみや歯の痛みの際に、どのような対応をしていたかを考えるのは、興味深いことである。

古来より、これらの時の対応の方法は、神仏に祈願するより他に仕方がなかったようで、各地の習俗や民間信仰の中に多く残っており、今なお伝承されている事例もある。

今回紹介する、群馬県沼田市にある石仏は、地元の人たちから「味噌なめじいさん」「味噌なめばあさん」と崇められ、古くから風邪や歯痛を治す霊験があると伝承されていて、人々は、風邪や歯痛になると味噌を持参し、石仏の口にこの味噌を塗りこみ、その快癒を一心に祈願すると治ると固く信じられてきている。